

乗雲

寺報

第112号

1985年4月創刊

R3.2.1 発行

〒959-2646 新潟県
胎内市西栄町2-8
TEL0254-43-2419
FAX0254-43-4560

編集人
広厳寺
住職 神田英俊

メール
otera@kogonji.jp

一期一会の人の世は

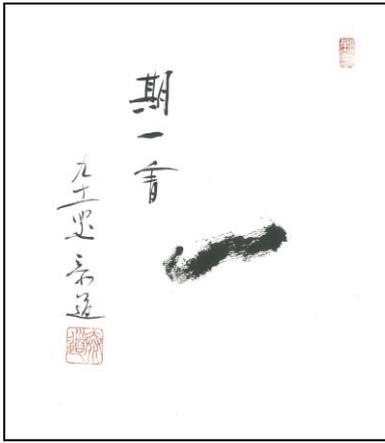
尊きものと知るものを

み篤き今日のおもてなし

いかで忘れん諸共に

(報謝御和讃)

梅花流詠讃歌の「報謝御和讃」の歌詞です。一期はこの世に生を受けてから死ぬまでの期間を言い、一期一会とは「生涯に一度限り」「今の出会いは一生に一度限り」という意味がある。



*色紙は臨済宗の松原泰道師(平成二一年寂・百一歳)が平成十年仏教講演会の講師で来られたときのもの。

お釈迦様の説法に、「四馬の譬え」があります。

一馬目：馬の蹄が鞭を振りかざすその影を見て走り出すほどの優秀な馬、二馬目：鞭が毛の先に触れて走り出す。三馬目：鞭が肉に触れてようやく走り出す。四馬目の馬：鞭を幾度も打つても気がつかないで肉が裂け骨まで達してから走り出す。この譬えは人々の無常の感じ方を四通りで表現しているものです。一馬：他の町や村で見知らぬ人の死を知り無常を悟る。二馬：自分の町や村で不幸に出会った時、我が身の死を意識し自分の生き方を考える。三馬：自分の身近な人、大切な人を亡くして初めて自分の死を感じる。四馬：自分自身のお迎えの時気づいても手遅れである。

この「四馬の譬え」は、早く無常を観じて、真実の教えに従い、日々を大切に生きよと教えています。私たちは命の儂さは十分知

っているはずなのに、何処か遠いところの話、自分とは関係のないものであるとして無関心で暮らしていることが多いものです。

道元禪師は、「光陰は矢よりも迅かなり、身命は露よりも脆し」とお説きになられました。「時間の過ぎ去ることは放たれた矢よりも早いもの、自分の命は草葉に宿る露よりも儂いものである、人生を無駄に過ごさず、一日一日を尊い一日と思つて精進せよ」と教えています。

一期一会の人の世は

尊きものと知るものを

新型コロナウイルスの感染拡大により私たちの日常生活、当たり前前に過ごしていたことが当たり前前でなくなり、新しい生活様式へと変わってきました。人と人の関わり方交わり方も変化しています。未だ自粛により人と会う機会は減っています。が、みな一期一会の出会いであり、生涯に一度限りということをお心に銘じ、無常の世、この先何が起きるかわかりませんが、今の出会い、今日の出会いを大切にしまいいりましょう。

令和三年 年回忌表

〔回忌〕	〔没年〕
一周忌	令和二年
三回忌	平成三十一年 令和元年
七回忌	平成二十七年
十三回忌	平成二十一年
十七回忌	平成十七年
二十三回忌	平成十一年
二十七回忌	平成七年
三十三回忌	昭和六十四年 平成元年
五十回忌	昭和四十七年
百回忌	大正十一年

▼令和三年(2021)度の年回忌表です。当寺では個人情報保護の観点から本堂には張り出ししていません。正當各家には昨年十一月中旬に通知していますのでご確認ください。▼日曜・祝日のご法事の申し込みはお早めにお問い合わせください。▼「周」は「めぐる」ことを意味する言葉で、亡くなってからちょうど一めぐりした翌年のその日を一周忌と呼ぶ。回忌とは亡くなられた日を最初の忌日と考えて、三回目の忌日が「三回忌」となる。以降は九六年目が七回忌、九十二年目が十三回忌となる。